

## 世界史

I 次の文章を読んで空欄に最も適切な語句または数字を記入し、下線部についてあとの問いに答えよ。

皇帝政治が2000年続いた前近代中国において、臣下の頂点に立ち皇帝を支えたのは宰相である。300年近く続いた唐王朝では、中央官制の最高機関である A の長官たちを中心に構成される複数宰相制をとったこともあり、延べ373人の宰相が就任した。その顔ぶれは名宰相から無能宰相までバラエティに富むが、後世の評価が分かれ論議の的になった人物もいる。8世紀に玄宗・肅宗・代宗・徳宗4代の皇帝に仕えた李泌<sup>りひつ</sup>はその一人である。

彼は、534年に北魏王朝が東西に分裂した結果、長安を拠点として成立した B 王朝の有力者の子孫で、いわゆる拓跋国家の人脈に連なる。幼少より秀才ぶりを発揮した彼を、7歳の時に玄宗が招いてその才能を喜んだと言われる。のちに宮中に召されて玄宗と皇太子（後の肅宗）の側近の学士となったが、玄宗の寵妃 C の親族である宰相楊国忠や有力節度使を批判したため追放された。

755年、D の乱が勃発すると、皇太子は父玄宗と袂を分かち、長安西方の朔方節度使の拠点である靈武<sup>れいぶ</sup>に赴き独断で帝位に即いた。これが第7代肅宗である。李泌はかつて仕えた皇太子の即位を聞くとそのもとに駆けつけるが、「自分は隠者である」と称して官位は固辞し、無位無冠の身分で参謀の任についたため兵士達から怪しまれた。その一方で、肅宗の長男である広平王を天下兵馬元帥に推し、元帥府の責任者となって奇策を提案するなど活躍した。しかし、肅宗の即位に尽力した妃の張氏<sup>きさき</sup>と宦官李輔国の兩人に疎んじられたため、唐朝が長安を奪回すると、李泌は宮廷を去って隠者の生活に入った。

その後、広平王が皇位を継承して代宗として即位すると、李泌を官界に復帰させようとした。しかし、朝廷では横暴な宦官や専権宰相が熾烈な権力闘争を繰り返しており、彼らに警戒された李泌は地方官の職を転々とするようになった。

代宗を継いだ徳宗は、即位早々に従来の税制に代えて年 E 回に分けて徴税

する新税制を施行するなど財政・政治の刷新に邁進した。徳宗は朝廷の意向に背く節度使も討伐しようとしたが、逆に節度使勢力の反乱によって窮地に陥った。そこで、徳宗は皇太子時代に教えを受け頼りにしていた李泌を呼び戻した。李泌はその期待に応じて業績を上げ、787年、ついに宰相に就任した。

当時の軍制は、国家が兵士に俸給を支給する傭兵によって軍を構成する F 制であったが、徳宗は辺境守備強化のため国初の府兵制復活を考えた。それに対して李泌は、派遣した兵士達に田地を支給して土着させるという、より現実的な政策を答申している。また、この頃、皇太子（後の順宗）と父徳宗との関係が悪化していたため、李泌は皇太子の庇護者としての役割も果たしていた。

李泌がとりわけ異彩を放ったのは外交政策においてである。D の乱後、唐王朝の最大の外敵はチベット高原にあった G であった。李泌は、北方のウイグル、雲南地方の H、西方のイスラーム帝国、さらにはインドと連携して G を包囲する戦略を構想した。ところが、皇子時代にウイグルの<sup>ほうう</sup>牟羽可汗によって幕僚を殺害されたことを怨んでいた徳宗は、ウイグルとの和親を頑として拒絶した。そこで李泌は、現在の可汗は牟羽可汗を倒した人物であるといって旧怨を捨てるよう説得に努め、ついに翻意させることに成功した。これ以降、ウイグルは唐朝との親善を保って G を牽制する勢力となり、9世紀の両国の和平に繋がる情勢をもたらした。

このように、対異民族政策を筆頭に卓越した業績を上げた李泌だが、その一方で、隠者を気取り「私は著名な仙人たちと友達だ」とホラ話を吹聴したことなどで後世の悪評を招いている。五代十国時代の王朝で契丹（遼）に臣従した I の時に編纂された『旧唐書』<sup>くとうしよ</sup>では、「李泌の軽薄さは朝臣達から馬鹿にされ、宰相職にあつて見るべき事績もない」と酷評されている。ところが、宋代に入ると歴史家達は小説史料を好んで用いるようになったこともあり、『新唐書』では李泌は政敵の攻撃をかわした知恵者であるとされている。また、『新唐書』と同じ宋代の『資治通鑑』では李泌の奇抜な献策が詳細に記載されていて、『資治通鑑』に注釈をつけた元代初期の歴史家胡三省<sup>こさんせい</sup>は李泌を類い希なる名宰相と称賛している。どうやら、漢族が異民族に対して劣勢となるに従い彼の評価が高まるようである。

〔問い〕 中国の伝統宗教である道教は、道家思想と不老長寿を求め仙人を目指す神秘思想とが結びついて形成された。この神秘思想を何と呼ぶか。

II 次の文章を読んで空欄に最も適切な語句を記入せよ。

1970年代半ばの中国は、抗日と革命そして建国を担った第一世代の指導者がこの世を去り、様々な課題が次世代にバトンタッチされる時期になっていた。

1975年4月、戦後長らく中華民国総統の座にあった蒋介石が台北市の士林官邸において没した。日本で軍事学を学んだ彼は中国統一事業に臨み、これを完成したかに見えたが、直後から日本との戦争に直面した。更に抗日戦争後は  との内戦に敗れて大陸を追われることとなった。臨終の時には、国際連合の代表権も喪失し、また、冷戦下における自由主義陣営の同盟国的な存在であった  との外交関係も断絶するという苦境にあった。彼が悲願とした「大陸反攻」はならず、その棺は故郷の浙江省奉化県に埋葬されるのを今も待っている。

翌1976年には中華人民共和国の要人が相次いで没した。1月には、長く国務院総理として国政や外交に力を発揮して、珍しく一度も失脚を経験していない実務家肌の政治家  が死去した。7月初旬には、八路軍総司令や中国人民解放軍総司令として軍事方面で活躍した朱徳が続いて死去した。7月末の唐山大地震の混乱を経て、9月9日には遂に建国以来の最高権力者として君臨し続けた  が没し、巨星が相次いでこの世を去ったのである。

かかる交代劇は人間が持つ寿命の表れだと読む事も可能であろうが、中国現代史の場合は、第一世代の元老たちが築いた功績が様々な意味で揺らぎ綻んだ時期と重なる点が興味深い。例えば、建国当初、社会主義の兄貴分として密接な協力関係を構築し蜜月状態を誇ったソ連との関係は、1960年代前半以来、「中ソ対立」と呼ばれる実質的な絶縁状況に陥っていた。また、隣国で起きた  戦争に際しても、北  への支援を通じて米国との対決姿勢を強めた。中国は世界の二大国を敵に回すがごとき独自路線を採用したのである。こうした「孤立」は、中国がいつ戦争状態に巻き込まれても耐えられるような態勢の構築を加速させた。すなわち、戦前から一定の経済的基礎を持つ沿海部を避けて内陸部を重視し、かつ、民需ではなくて軍需に力点を置き、しかも、集中より分散を選択するという国家建設の方針であった。この方針のため、中国の採った独自路線はおよそ経済的合理性とは乖離した中身にならざるを得なかった。

内政面においても穏健路線を主張するグループは「走資派（実権派）」として徹底的に排除された。その代表格とされた国家主席 **F** は、失脚後の1969年に獄死している。また、**D** の親密な戦友であり後継者として党規約に明記された左派軍人の林彪も、1971年のクーデタ未遂後、ソ連亡命の途中で墜落死したといわれる。

文化大革命と呼ばれた実質的内乱が続いた結果、中国は世界から「鉄のカーテン」ならぬ「竹のカーテン」の向こう側にある謎めいた大国といった印象すら持たれていた。しかし、1972年の米国大統領ニクソンの訪中や **G** 正常化などの動向からは、ソ連ではなく西側と接近することによって混迷から脱する契機をつかもうとしていた中国の姿勢を窺うことができる。ピンポンやパンダなどソフトな手段も用いたイメージ改善をしたたかに進めつつ、「ソ連社会帝国主義」論を掲げることによって西側資本主義国に接近する大義名分を獲得し、宿敵とさえ手を結ぼうと試みたのである。

**D** の没後、その後継者となった **H** は、当初は従来の路線を継承するかのようには思われたが、文化大革命の継続を目指す **I** 組と呼ばれた左派集団を逮捕・追放し、不倒翁のあだ名を持つ実務派の鄧小平を再度復活させた。かくて、中華人民共和国は農業・工業・国防・科学技術を柱とする近代化路線に大きく舵を切ることになる。

その後の紆余曲折はあるものの、革命第一世代の退場は現在の中国を生み出した始期と捉えることが可能だろう。だが、国内では文化大革命を継続しようとする動きにストップを掛けた段階に至ってもなお、国外での立ち位置は微妙だった。例えば、カンボジアで親米派から政権を奪取した **J** 率いるクメール=ルージュは、文化大革命の影響を受けて極端な共産主義的社会を確立せんとして、都市住民やインテリ層など100万人から170万人もの犠牲者を生んだ大虐殺を行なったが、彼らは中国による支援を受けた集団であった。その **J** 政権を打倒しようと **E** の支援を受けたヘン=サムリンが1979年にプノンペンを陥落させると、それに対する「懲罰」として **E** に戦争を仕掛けて撃退されるなど、中国はおおよそ大国のイメージにふさわしくない姿も確認されるのである。

Ⅲ 次の文章を読んで空欄に最も適切な語句を記入し、下線部についてあとの問いに答えよ。

1402年に中央アジアから進軍してきたティムール朝に  A  の戦いで敗れたオスマン帝国は、約10年の空位時代を迎えた。バヤジット1世の遺された息子たちが王座をめぐる争い、分裂していたのである。1413年に王族間の争いを制して即位したメフメト1世は、失っていた旧領を回復したものの、内乱は鎮圧できないまま没した。その息子であるムラト2世は相次ぐ内乱に対し非凡な手腕でもって臨み、オスマン家の権威を再確立することに成功した。

このムラト2世と、<sup>(1)</sup>フランス系のキリスト教徒の奴隷とも言われる女性との間に生まれた子が、後に「征服王」と呼ばれるメフメト2世である。彼は、1432年、オスマン帝国の当時の首都であった  B  に生まれた。幼少期には当代一流のイスラーム学者・知識人（アラビア語で  C  という）に学び、君主としてふさわしい教養を身に付けた。トルコ語に加えてギリシア語やセルビア語も流暢に話したという。

成長したメフメト2世は、アナトリア西部のマニサの知事に任じられた。側近には、「王の奴隷」と呼ばれる元キリスト教徒の奴隷身分の人々が集っていた。メフメト2世の異母兄で王位を継承すると見られていたアラエッティンが側近によって殺害されると、悲嘆したムラト2世は生前退位し、メフメト2世が12歳で王位に就くこととなった。しかし、マジヤール人によって建てられた  D  王国や現在の<sup>(2)</sup>ルーマニアにあった公国がこれを好機と見て侵攻してきたため、この危機に対応すべく、時の宰相の要請に応じて1446年の夏にムラト2世は復位した。その5年後にムラト2世が死去すると、メフメト2世は再度即位した。

メフメト2世は即位して間もなくコンスタンティノープルの攻略に着手した。この都市の名前は、 E  金貨を発行したことで知られるローマ皇帝コンスタンティヌス1世の名にちなむ。コンスタンティノープルはビザンツ帝国の帝都として繁栄し、6世紀にはハギア=ソフィア大聖堂が建設された。15世紀にはビザンツ帝国は小国に過ぎなくなっていたものの、コンスタンティノープルを囲む三重の大城壁は外部からの侵略を難しいものとしていた。そのため、メフメト2世はボスフォ<sup>(3)</sup>

ラス海峽に砦を築いて黒海方面からの船の交通をコントロールするとともに、技術者に巨大な大砲をつくらせた。

1453年、コンスタンティノープルは総勢10万人といわれるオスマン軍により包囲された。包囲されること2か月、大砲によって城壁が破壊されると、デヴシルメ制によって徴集・訓練された歩兵常備軍である **F** が突入し、ついにコンスタンティノープルは陥落した。この都市は、その後徐々に、ギリシア語の「イスティンポリン（街へ）」に由来するとも言われる「イスタンブル」と呼び慣らわされるようになっていく。メフメト2世は荒廃していたイスタンブルを復興させるべく、人々をイスタンブルへ強制移住させたり、大規模なモスクや宮殿を建設したりして、帝都イスタンブルをつくりあげていった。ハギア=ソフィア大聖堂は、アヤ=ソフィア=モスクへ転用された。その後もメフメト2世は、征服王の名が示すように様々な軍事活動を展開し続け、30年に及ぶ治世のほとんどを戦場で過ごした。特に、「アドリア海の女王」と呼ばれたイタリアの都市国家 **G** との戦いは16年にも及んだ。

メフメト2世は古代ギリシアの書物を愛読していたことでも知られる。その蔵書には、**H** が詠った『神統記』や **I** が著した『神学大全』のギリシア語訳があったと言われる。また、ルネサンス文化を愛好し、**G** の画家を招聘し自身の肖像画を描かせた。オスマン帝国の画家はこうしたイタリアの画家の影響を受けて、新しいモチーフと手法を取り入れた<sup>(4)</sup>絵を残している。もっとも、メフメト2世は公人としてはイスラームの帝王としてふるまい、イスラーム法にのっとった統治を行った。

1481年、進軍中であったメフメト2世はイスタンブルの近郊の現在のゲブゼ付近にて没した。病に倒れた彼を診察した医師は、アヘンによって痛みを和らげることはできなかったと言われる。奇しくも、ここは、かつてザマの戦いでローマ軍に敗北したカルタゴの英雄 **J** やローマ皇帝コンスタンティヌス1世が死去した地でもあった。

同時代の歴史家たちによるメフメト2世に対する評価は決して高くない。メフメト2世は、権力を有していた自由人のイスラーム教徒たちを解任して力を削ぎ、「王の奴隷」を政権運営の主体に据えて君主権力の絶対化を進めた。同時代の歴史

家たちは既得権を奪われた側に属していたため、メフメト2世を低く評価したのは当然かもしれない。彼の評価が高くなったのは19世紀半ば以降のことであり、トルコ共和国<sup>[5]</sup>においては今でもイスタンブール征服を記念する行事がたびたび行われている。

- [1] 16世紀にはいると、オスマン帝国の君主はフランスをはじめとしたヨーロッパ諸国に通商上の恩恵的特権を与えた。この特権を何というか、カタカナで答えよ。
- [2] 現在のルーマニアは、1859年にモルダヴィアともうひとつの公国が連合公国を形成することでつくられた。この公国を何というか。
- [3] 19世紀のエジプト=トルコ戦争において、オスマン帝国を支援したロシアは、黒海と地中海を結ぶ水路の2つの海峡の独占的通行権の獲得を目指した。そのひとつはボスフォラス海峡だが、もうひとつは何海峡か。
- [4] ヨーロッパやイスラーム世界で発展した精密な技法で描かれる、写本の挿絵を何というか。
- [5] 1923年に成立したトルコ共和国は連合国と講和条約を結び、現在のトルコ共和国とほぼ同じ領土を認められることとなった。その条約を何というか。

IV 次の文章を読んで空欄に最も適切な語句を記入し、下線部についてあとの問いに答えよ。

人間社会においては、古代から奴隷などの不自由身分の労働力が生産のために用いられてきた。ヨーロッパもその例外ではない。古代ギリシアにも奴隷制度が存在し、その多くは家内奴隷として家事や農作業などに従事した。有力都市国家の一つであったスパルタでも、被征服民を起源とする隷属農民である  が存在し、<sup>(1)</sup>スパルタ市民の土地の耕作に従事していた。

古代ローマにおいても奴隷制度は存在し、征服戦争によって獲得された奴隷などが家内労働や農業、鉱山での労働に用いられた。その中には、  と呼ばれる古代ローマの大土地所有制の下で、富裕層の所領において果樹栽培などに従事させられる者もいた。一方、奴隷の中には闘技場において猛獣や人と戦わされる  となる者もいたが、紀元前73～71年にかけては、この  の一人でトラキア出身のスパルタクスを指導者とする大規模な奴隷反乱が発生している。<sup>(2)</sup>

中世のヨーロッパでは、荘園領主の支配のもと新たな形態の不自由身分の労働力が用いられるようになった。<sup>(3)</sup>土地や労働の面のみならず法的にも領主に隷属する  と呼ばれる身分の農民である。これらの人々には、結婚税や死亡税の支払い、領主の直営地などでの強制的労働である  の義務、さらには貢納の義務などが課せられた。しかし、13世紀末から14世紀にかけて、貨幣経済の浸透に伴い領主の持つ特権の撤廃や緩和が進み、西ヨーロッパでは  の解放が進んだ。

一方、ヨーロッパやアメリカの歴史に現われた不自由身分労働力に関する制度や出来事のうち、現代にいたるまで多大な影響を残しているのは、近世以降に発展した大西洋世界での奴隷制度およびそれに伴う奴隷貿易であろう。15世紀から、スペインはポルトガルとともにこの大西洋世界を含む海外への進出を本格化させていった。スペインはその過程で、1494年にポルトガルとの間に  条約を結んで、両国の海外領土の範囲を定めた。その後、スペインは主に中南米地域に植民地を拡張していく。スペイン王室は、これら中南米の植民地において、キリスト教への教化を条件に、先住民を労働力として用いることを植民者に認める  制を導入したが、これは鉱山や農場において植民者による先住民の酷使を招く結果となった。



酷使などによって人口が急減した先住民にかわって、スペイン領植民地で新たな労働力の一つとして導入されたのが、主に西アフリカや中央アフリカ西部から強制的に連行され奴隷にされた人々であった。これらの人々を労働力として用いるため、スペイン王室は **H** と呼ばれる独占的奴隷供給権をポルトガルやオランダなどの外国商人に与えて、スペイン領アメリカへの奴隷貿易を行わせた。このような奴隷貿易<sup>[4]</sup>は、その後、他のヨーロッパ諸国のアメリカ植民地に労働力を供給するためにも行われた。それらの植民地の奴隷たちは、 **I** という大農園でサトウキビやタバコ、綿花などの商品作物の生産に従事させられた。しかし、このような奴隷制度は過酷な労働と支配を伴うものであったため、しばしば大規模な奴隷反乱が勃発した。その多くは失敗に終わったが、まれに成功するものもあった。カリブ海にあるフランスのサン=ドマング植民地（現ハイチ）で1791年に起こった蜂起<sup>[5]</sup>においては、反乱を起こした奴隷たちは、最終的に新たな国家を作り、フランス人の支配から独立することに成功している。

その後、19世紀に入ると奴隷貿易や奴隷制度は各地で順次廃止されていく。そして、19世紀末に、最後まで奴隷制度が残っていたブラジルとキューバ、プエルトリコで奴隷制度が廃止されたことで、大西洋世界における奴隷制度は終わりを告げた。しかし、この奴隷制度とも関わりの深い人種差別の問題<sup>[6]</sup>や、それに伴う貧困の問題はその後も残り続け、今なお大きな問題となっている。また、今日でも発展途上国のみならず先進国でも少なからぬ数の人々が実質的な隷属状態に置かれている。奴隷制度は決して過去の問題ではないのである。

- [1] スパルタは、被征服民の支配と軍事力の維持を目的として、少年期からの共同生活、土地の売買や他のポリスとの交易の禁止などの特徴を持つ軍国主義的な国制を有していた。このような国制を作ったとされるスパルタの伝説上の指導者は誰か。
- [2] この反乱の鎮圧に貢献し、のちにカエサルやポンペイウスとともに第1回三頭政治を成立させたローマの政治家・軍人は誰か。
- [3] 中世ヨーロッパの荘園領主は国王の課税権や裁判権の行使を拒否する特権を持っていた。その特権を何というか。

- 〔4〕 この奴隷貿易には、ヨーロッパの商人とともにアフリカ現地の商人や政治権力も関わっていた。17世紀初頭から1894年にフランスの植民地となるまで、西アフリカの現ベナンに存在した、ヨーロッパ人を相手に奴隷と武器弾薬の交換取引によって強大化した王国の名前を答えよ。
- 〔5〕 そのころフランス本国ではフランス革命の勃発後、1793年の国王の処刑をきっかけに、フランスと他のヨーロッパ諸国との間に緊張が高まり、同年にはイギリスやオーストリアを中心とする対仏軍事同盟が結成された。この軍事同盟の結成を呼びかけ、その成立に貢献したイギリスの首相は誰か。
- 〔6〕 かつてイギリス帝国内の自治領であった南アフリカでは、アパルトヘイトと呼ばれる人種差別的隔離政策が第二次世界大戦後に強化され、1991年に撤廃されるまで続いた。このアパルトヘイトに反対する運動の指導者で、1994年に南アフリカ共和国の大統領となった人物は誰か。